

Profile 23

1997 広報の必要性を実感

大阪の短大で住居学を学び、卒業後は、設計事務所働きながら、夜間の専門学校でインテリアを勉強した。もともと建築家を目指していたが、「どうしたら雑誌に自分たちが設計した家を紹介できるのだろう」という疑問を抱く。当時、一般雑誌にも建築特集が組まれるようになり、建築家や設計事務所が注目されはじめたが、関西いざとなるとマスメディアの人たちと知り合う機会も少ないため、次第に広報や宣伝の必要性を実感することになる。

2000 上京、広報という職業を知る

東京に引越し、建築プロデュース会社へ就職。急遽の広報を担当することになる。毎日、出版社などのマスメディアに連絡をして「こういう住宅があるので紹介してほしい、来てほしい」と売り込む。建築にいろんなジャンルの人たちが興味を示していたこともあり、多くのマスメディア関係者と知り合いになる。2003年、デザイナーが岐阜ちようちんの技術を使って新しい照明器具をつくる[Lx.(ルクス)プロジェクト]に携わり、フリーランスの広報としての活動をスタート。

2005 アートの広報を初めて手がける

フリーランスという立場を生かし、東京に住みながら大阪にある「KPOキリンプラザ大阪」の広報を担当。キリンビールという企業が文化支援をするということに興味があったため、06年10月のスペース閉鎖まで、2年間仕事を続けた。当時、五十嵐太郎、後藤繁雄のほか、このスペースをオーガナイズしていたのは、ヤノベケンジや榎本野衣といった人たち。このとき初めて、平さんは、仕事としてアートと関わり、このジャンルの広報活動にも目覚める。

2007 広報を超え、幅広い業務へ

津田直の写真集「漣」のプロモーションにも協力。書籍の広報は初めての経験だったが、新聞や雑誌の書評欄へのアプローチだけでなく、森岡書店(東京)、graf(大阪)でのスライドショーによる展示イベントも手続った。また、五十嵐太郎がコミッションを務めた「リスボン建築トリエンナーレ」の帰国展(OZONE、東京)では、広報の立場でありながら、企画書作成や会場探し、予算集め、展覧会構成にまで幅広く携わった。

2008 ビッグプロジェクトの広報担当に

大阪のホテルを使ったアートフェア[ART OSAKA]や「横浜トリエンナーレ2008」といった大型のアートイベントの広報を担当。トリエンナーレは開催の約2年前から関わり、とくにアートが専門ではない他ジャンルへの広報活動を積極的に展開。新聞の文化欄だけでなく生活欄での紹介も増えた。また、観客動員に大きな影響を与えるテレビ番組へのアプローチが、ここ数年の課題という平さん。「横浜トリエンナーレ2008」は、NHK「英語でしゃべらナイト」でも取り上げられるなど、単に展覧会情報を伝えるだけではなく番組に企画を提案し、放映された。

について説明しても、何をやってるか理解してもらえないこともある」それで、フリーランスによる広報代行の仕事は、日本のアート界ではまだ馴染みが薄い。そのため独立の際には、建築家などいろいろな人にヒアリングを行った。また、仕事の中で自身のスキルを磨いていったという。

「GEISAIHIOの広報を担当することになったとき、最初の打ち合わせで主催者の村上隆さんに「君は何ができるの?」と問われたことがある。これまででGEISAIHIOは、あらゆる広報活動を、独自に行っており、それを越えるものを求められ、記事の切り口を提案するといった企画力を学んだという。また、同時期に「アートフェア東京」のディレクター辛美沙さんに会ったことが、この道で生きる決意を固めた出来事となった。「美術のプロジェクトにならないで、広報のプロになってほしい」というアドバイスももらい、するべきことがはっきり見えた」と語る。

毎日大量の展覧会やイベント開催編集者やライターの手元には、あらゆる広報活動を、独自に行っており、それを越えるものを求められ、記事の切り口を提案するといった企画力を学んだという。また、同時期に「アートフェア東京」のディレクター辛美沙さんに会ったことが、この道で生きる決意を固めた出来事となった。「美術のプロジェクトにならないで、広報のプロになってほしい」というアドバイスももらい、するべきことがはっきり見えた」と語る。

大きなミッションを感じている。そのため、マスメディアの人たちやアーティストとコミュニケーションを円滑にする努力は怠らない。また、フリーランスだからこそ、ひとつの組織に留まることなく、自由に動き、多種多様な展覧会に関わることができるとのこと。 「アートや建築の広報なら平さんに頼もう、と言われた。自身の手がける展覧会に一人でも多くの人に足を運んでもらうために、平さんは広報のプロとしてつねに切磋琢磨する日々を送っている。



平昌子さん

TAIRA MASAKO
PRESS OFFICE

フリーランスで展覧会の「広報」を行う平さん。日本のアート界では、広報のプロフェッショナルは、まだまだ少なく、平さんも独学でこの道に入ったという。その試行錯誤の日々に迫る。

アートのプロではなく、
展覧会広報のプロを目指して

平さん取材したのは、2008年秋に開催された「青夢道アートフェア」の期間中。広報の仕事に関するトークイベントにゲストとして平さんは出席。このフェアでは、街の様々な場所で作品が出現

「関西の設計事務所勤務していたとき、どうやらマスメディアに「こんな家に住みませんか」という提案を記事にしてもらえるのだろうかと思って」。10年ほど前、広報の必要性を感じたという平さんは、2000年に上京し、建築プロデュースの事務所へ就職。その職に就きノウハウを取得。その後、フリーランスでアートや建築に特化した広報を行うようになる。この仕事の中で、平さんが重要と考えているのは、アーティストへのリサーチだ。「展覧会がはじまる前に、できるかぎりアーティストにインタビューをし、作品に

ついて聞き出します。制作過程を共有し、その「温度」がわからないと、内容を説明するのが難しいから」。このインタビューをもとに、マスメディアに内容を紹介する「プレスリリース」をつくる。また、個別に連絡し、掲載や放映を依頼。会期中は、取材対応をし、最後に掲載された記事をまとめた報告書を作成。この一連の流れが主な仕事で、会期前後の3か月から半年ほどプロジェクトに関わる。 こうした仕事を、もっぱら独学で切り開いてきた平さん。「仕事

展覧会を多くの人に伝えるために 展覧会を開くときに、欠かせない活動のひとつが「広報」だ。平昌子さんは、企画内容やイベントの時期にあわせて、告知や宣伝を代行する仕事をフリーランスで行っている。



「Lx.(ルクス)プロジェクト」(2003)は、平さんがフリーという立場で広報を行った初めての企画